

この涙を明日に残して

竹内てるよ



——人を明日に残して  
竹内てるよ



竹内てるよ 本名、竹内照代。明治37年、北海道生まれ。日本高女卒業後、詩、童話、小説を発表して知られる。日本文芸家協会、児童文芸家協会会員。主著に、詩集「生命の歌」／＼ひかり立ちぬ／＼花よわれらは／＼小説「いのち新し／＼わが愛の書」／＼母この最後なるもの／＼／＼傷の中の青春／＼などがある。現住所 大月市猿橋町船久保住宅

廃止  
検印

定価 360 円

この涙を明日に残して

昭和41年3月20日 初版発行

著 者 竹内てるよ ◎

発行者 大島守正

発行所 番町書房

東京都中央区京橋3の5

電話・東京 (567) 0311

振替・東京 15844

印刷・太陽印刷 製本・二葉製本

この涙を明日に残して

目次

■ 厚岸に星は流れて ■

判事の祖父と囚人…7

美しい母が母でない…32

悲しき花の冠…49

北国よさようなら…57

■ 緑なき愛の果てに ■

都会の片隅で…73

継母の黒髪に泣く…77

血を吐きながら結婚…84

祖父の臨終…95

奇跡の出産…107

涙が凍る日び…118

真二よ許せ…134

■ 生きたるは母の責務 ■

山峡の町へ逃れて…157

拘置所で見つけたわが子…168

ひたすらに真三を待ちて…185

母としてわが愛を…202

■ 清純な愛を泥の中に ■

わが子帰る…217

鉄格子の道へ再び…236

胎児の頭は砕かれて…253

■ 碧落に祈りをこめて ■

やくざ仲間と問答…275

この手にわが子を…294

死に幸福を奪われて…312

あとがき…333

装 釘・山 崎 祐 司  
カバー写真・田 辺 清 光

厚岸に星は流れて



## 判事の祖父と四人

明治四十一年冬――

北海道、釧路国、厚岸町あつけしというこの北端の古い漁業港にも、かたい粉雪と、ときに大きい牡丹雪ぼたんとがかわるがわるに降っていた。それは、吐息の出るような、待ちどおしい時間の後にやって来る春であった。水浅黄いろの空のむこうに、春はこっそり、おどりのしぐさのようにちよつとしたゼスチュアをのぞかせて、子供たちにたのしさを約束した。

東端をバラサン岬といい、西に入江のように港を抱いた岬を、龍神岬という。現在はそこに汽車がつく。その頃は船よりほかに連絡はなかった。入江のまん中とおぼしいところから見わたすと、二つの岬に抱かれてただ一カ所、海の切れている横線に、はるかなる太平洋の姿がかいま見える。それは子供をあやすと思いがけないときに笑って、ちらりとみせるえくぼのように、不思議な愛らしさと未来とを示していて、そのくせどこかに不屈なたくましさのある風景であった。

地平線まで白一色の雪は、夕ぐれの陽のかげりに、雪のくぼみごとを背くして、白の中の黒いしみのように、やせた老馬の引く雪橇は、その中をしばらく走つてとまる。

橇は午後四時半の暗くなった裁判所の庭にとまって、おこそを深くかぶった姿のいい女を降した。女はそのまますい込まれるように裁判所の入口に入ってゆく。私は、子供部屋のガラスにび

つたり頬をつけて見ていたが、子供心にも、その女に対する哀れさが波のようにおしよせてならなかった。

その夜、こたつの中で、祖父の手をいじりながら私はきいた。

「さっきの女の人、だあれ？」

「あれは太田村の、おさきという女じゃ、夫に去り状をもらつたのに逆上して、乳で幼い子を殺したのじゃ」

「まあ、お乳で？」

と祖母はおどろいて祖父を見上げる。

「そうじゃ、女の一番大切なところで、子を殺すとは、鬼よりおそろしい女ぞ」

「そうじゃ、罪を犯す人間は、大ぜいの人の中にいくたりもない。いく千人の中の一人なのだ。その一人にあの女はなった。なんという不幸なことであろうの」

祖父はしみじみとランプの灯を見ながら、さらに祖母に言った。

「あの女を他の女にみかえた夫もよくない。何か町の遊廓の女を引かせたということじゃ。あの女はきちんとした網元の女ぞ、学校にも行った娘じゃ。子供を殺した理由がの、自分の去って行ったあと、商売人の女が家に入って子供を育てると思うと不安でならぬ。それでいっそ殺してしまおうと考えたそうじゃよ」

日本ではまだ開校されたばかりの明治女学校を卒業している祖母は、当時の女としては常識も

あり、教養も受けているほうであつた。

「それで、その女は何んというとります？」

「うむ。自分の子を、自分が殺したのじゃ、何んのお世話もいりませぬと、ま、こういった意見じゃ。人間そうまで考えちがいをすることもできるものなのかな」

「まったく、人間社会で生活する資格はありませんですねえ」

と、祖母は言つた。

青い雪の中のたそがれを背にして引かれて行つた女の姿は、幼心にいつまでも、かなしみの尾を引いて残り、人形あそびをしているときにも、私はふと手を休めて窓の外を見た。

それは女の一生にとってたびたびゆきあうことではない。女が子供を殺してまで、その現在ある生活をのがれようと計画することのその哀れさが、私の心を打つた。女と生まれた者にとって、その幼きと、成長したときにかかわらず、女の哀れはたしかに直感をもつて受けとめられるものであつた。運命とも、宿命とも、まとまつた言葉でいいあてられない、まだ前髪の毛がゆれる幼い私の心にも、その真実は、たしかにつよく入り込んで来るのであつた。私はそれを受けとめていた。

浦辺二郎は十五歳の少年、貧しい漁夫のせがれで、仲間にはかにされたのを怒って涙の倉庫に放火して山の中へ逃げ込んでしまった。さわぎにまぎれて、干鰯だちを一抱えもち出したほかは、春

ではあったが、着のみ着のままである。漁港はやさしい春で、山の上のお寺の国泰寺には、あまちやの花が咲いていた。

あまちやの花というのは、あじさいの一種で、その葉や茎をせんじて、あまちやを作るのだ。あまちやをもらう頃になると、野生のさくら草も美しい花をつける。二郎は横笛が上手であり、だれにもらったのか大切にしていよい笛をもっていた。多分、にしん漁の時に東京から来る、出面さんという出稼人のだれかからもらったものであろう。二郎はそれをもって山に入った。いく日も、月のある夜がつづいた。

警察の人達は山狩りをしたが見つからず、町の人びとも不安がった。岸田巡査はまだ任官したばかりで、札幌から来た青年であったが、この山狩りには先頭をうけたまわっていた。目のくるとした元気な若者で、お正月には私の家の新年宴会で、新しいはやりうたをうたって人気があった。お手伝いのみどりねえやなどは、牛乳屋さんといいくせに、宴会をのぞきに行つて、頬をはてらしたりした。

岸田巡査は二郎と顔見知りであつたし、二郎に横笛を吹かせてうたつたりしていた。

倉庫の石段に腰をかけて、心ゆくまで「露営の歌」などを吹く二郎の笛にあわせて、岸田巡査のきれいなバリトンをきいたことのある祖母もよく知っていた。祖母は言っていた。

「あの子にはいい才能がありますねえ、きちんとした家で生まれていれば、そのみちで立つてゆける子供ですねえ」

二郎には母がなく、父がのんぐれであったので孤児同然であった。いつもそこいらをうろついていた。私の子供部屋の窓の下で笛を吹くときは、お腹のすいているときで、祖母はなにがしのお金と、食べものを与えた。

岸田巡査は二郎を可愛がっていた。この山狩りには先頭を買って出て、彼には二郎をきつとつれもどすのだという自信があった。夕月が山のお寺の石段からよく見えて、空気のあまい夕方であった。岸田巡査は、こう考えていた。今夜、月が昇ってから山へ行つて笛を吹けば、きつと二郎が出て来ると。岸田巡査は出がけに、

「判事さんところの大奥さま、子供の古いおねまきを一枚ください。それにむすびを三つ四つ作つて下さいませんか、二郎に」

と言った。祖母はうなづいて、私の古い綿入れや、ねえやに作らせたおむすびを紙に包んで、岸田巡査にわたした。岸田巡査は、黒ぬりの横笛をバンドのところにさしていて、

「これで、さそい出そうてんですよ」

その声が夕あかりの中で笑いながらひびいたとき、私はぞっとしてとびあがった。日頃やさしいこの人が、二郎の一番すきなものを、捕えるためのさそいに使うのだと思つたとき、私はひどい恥辱を受けたように腹立たしかつた。大人たちは、何んという残酷なことをするのであろうと、私は許せない心持であつた。二郎が哀れでならない。心のよいものを、大人たちはよつてたかつていじめているような気がしてならなかつた。

山明りなかで山腹の切り株に腰を降して、岸田巡査はひとり横笛を吹いていた。山から谷へ、谷から山ふところへと、笛の音はしろがねのひびきをもって、こだまをよんだ。原始林の、ひっそりした夜を、木ぎたちは葉ずれの音さえ、さしひかえるようで、かたい針葉樹さえも、いいあわせたように声のない息吹きをしていた。その葉ずれの音は抱きあうようにやわらかであった。溪流は、大ぜいの若い女がおしやべりをしているような音を快活に立てて、山全体の重くるしさを明るくしていた。流れの音を聞いていると、自分が地上で一番たしかな人間のような気分になる。岸田巡査はうた口をしめす。

ここはみくにを 何百里 はなれて とおき 満州の ……………

夜空にはびっくりするほど、星が大きく出ていた。岸田巡査の笛が、くりかえして、二曲を吹き進んだとき、とおく、溪流のひびきのきこえる谷の方から、その笛にあわせて、おなじく「ここはみくにを 何百里」とあわせるのがきこえて来た。

岸田巡査は、いたなと思った。しかし笛はやめなかった。相手の笛は、岸田巡査のよりさらに美しく、思いつめたような切実さと、子供っぽいやさしさとをあわせてひびいてきた。岸田巡査は、満足のほえみをうかべたが、目はつめたく夜の中に光った。

二人で、一曲吹きおえたとき、岸田巡査は、

「二郎、出て来い。俺だ。岸田の兄ちゃんだ。何にも恐ろしいことはない。早く出て来いよ、おむすびや、ビスケットだぞ……」

と言った。

そして耳をすました。

そのとき岸田巡査のすぐ後で、熊笹が鳴った。

二郎の吹く、童謡が聞こえて来た。

笛のうた口を唇にあてて、二郎のおどけた姿が、岸田巡査の視野に入ってきた。

岸田巡査は、思わず、

「おお、無事だったかよ」

と言って、二郎に近よった。

二郎は走って来て岸田巡査に拘かれた。そのとき、岸田と二郎とは、巡査と犯人ではなかった。一人のみなし子と、若い一人の青年であり、可愛がっていた兄ちゃんであった。

やがて木株に腰をかけて、岸田巡査にもらったおむすびをおいしそうにたべた二郎は、にっこりと笑いながら、

「兄ちゃん、しばって」

と、言って立ち上がった。

「みんなに、心配かけてわりかったで」

と言うのが、あわれにも、けなげにも見えたという。

岸田巡査も胸を打たれたので、

「いいよ、二郎、そのままで行こうよ」

と腰に笛をさして立ち上がった。

けれども、そのとき、岸田巡査も二郎も、人生の大きな運命にゆきあたっていたのだ。二人ともに、そのことを知らなかったが……。

せつかく迎えに来たのだからと、岸田巡査が、そのとき、もし、自分のからだに二郎をしつかとしぱりつけるか、手にとりなわをもつかしていたら、二人の身の上は、もっとちがっていたかもしれないのだ。

だれも予測しないうちになされる一つの人生の谷間の出来事というものは、何んという不思議なものであろう。

岸田巡査は、私の綿入れを、二郎のやせた肩にきせかけた。まだ、ほんとに幼い少年の色白の肌には、赤い綿入れは、月光の中でもよく似合った。

その身の上が哀れで、どんなに乱れていても、天成の美しい黒かみが、ひたいにたれ下って光るので、月光をまともに受けた少年は、人形のように美しかったという。

山路は下りにかかって、けわしい溪流を見下す谷にかかった。

二人はたのしい心持で、少なくとも岸田巡査は、自分が二郎になわをかけなかったということに多分の満足をもって歩いていた。

流れは不思議な生きもので、じっと聞いていると何かを話しかけているように、二人の心にせ